

■ 書 評



人の絆の病理と再生 —臨床哲学の展開—

加藤 敏 著
弘文堂 2010年11月
272頁, 定価 3,570円

人間は人間が何であるかを問い、その答を不断に変更する。またおそらく人間のみが、人と人との間のあり方を不断に変え続ける。このような人間の探究は、純粹哲学、社会学、健全人を対象とする心理学、生理学などの特権領域ではない。人間の本質は、人間が病むときの病み方を調べることによって、照り返され、露になる。人間の探究に、人と人の絆についての思索に、臨床哲学が出席する所以である。著者の言葉を借用すれば、現代の哲学がますます「狂気内包性」を帯び、精神病理学と呼応し合うことには、必然性がある。

この「狂気内包性」の語のように、思索の海の中から軽やかに的を射るタームを掬いあげ呈示するのが、著者の巧みである。とりわけ冒頭の総論とアウグスティヌス論においては、「構造的メランコリー」と「パラノイア性自我」の語に焦点が当てられる。前者は、言語世界に組み込まれることを運命づけられた人間が原初的な「もの」の喪失を蒙る事態を指す。後者は、自我への根源的な他者の先行的侵入を否認しつつ、他者に対する権利的優位を確信する自我を指す。人間は誰しも、このメランコリーとパラノイアの間で揺れ続けるのだが、根源的メランコリーを引き受けるところ

に生じる出会いこそが、人間の絆を再生に導くことを著者は主張する。

喪失によって生じた虚空の場の周囲に人間の活動を取りまとめようとする否定神学的議論には異論があるかもしれない。しかし著者の筆致は、拒食症患者であつたらしいシモーヌ・ヴェイユ論で、にわかに臨床に切迫し始める。特異な生を送り思索を続けたヴェイユの、「真空を望む」という言葉は、読者の心をうち、この病への敬意を呼び起こす。統合失調症論において「所有」概念の歴史をとり上げるところにも著者の独創性が光る。言葉がすでに反復可能性によって汚染されているものならば、なぜ言葉による思索は「私の」思索とされ得るのか。この統合失調症問題と不即不離の「超越論的」問題に、「所有」概念の歴史的成立過程という「経験的な」側面から切り込むという離れ業が演じられている。メルロ・ポンティをラカンを参照しながら論じた章では、ラカンのセミナーにおける、対象からの眼差しに対するスクリーンとして絵画という難所が読み解かれる。これは、アール・ブリュット（病者の絵画芸術）と芸術家の絵画芸術の間の、近さにおける隔たりとでも呼ぶべきものへの手掛かりを読者に与えるであろう。現代社会のアスペルガー化という指摘は、画像、数字などのみを科学とし、感性と言葉を放擲しないと落ち着くことのできない現代精神医学への批判でもあり得る。しかし、現在の遺伝子研究を著者なりの立場から咀嚼、解釈することも著者は怠っていない。

真実は判明に現われるにしても簡明には現われないことを知っている良識ある読者に広く読まれることを期待したい。

(津田 均)